



夭折（私見では、アラフォーまで）した歌手で、私の記憶に残っているのは、高倉敏、ZARDの坂井泉水、大塚博堂などであるが、戦前の日本にもいたのですね。北廉太郎はまさに、一般的には埋もれ忘れられていた人でしょう。わづか、約4年余の活動。私がこの歌手を知ったのも、つい半年ほど前。今回、ユーチューブ等で5、6曲聴いてみて、このままでは本当に惜しい歌手と痛感し、取り上げてみました。もちろん、とてもいい曲です。彼は呈示されているプロフィールでは不明だが、クラシックの素養があるのでは。声質や歌唱法の雰囲気は、真木不二夫に近い。けれど、真木よりも柔軟な歌唱力があるようだ。軽快なメロディーに帯びるほのかな哀愁と郷愁、そつなく高音もこなす、ふんわりと乗る柔らかなテノール、ロマンティックで文学的な歌詞。あと他に「出船の唄」も、独特の哀愁と節回しがあって、とてもいい。けれど、わづか20才の青年が、どうしてこれだけ大人の心を唄い得たのであろうか。勤めていた頃、多くの現代の若者を身近に見てきた私には、不思議でならないのだ。

丘越えて馬車はゆくよ 思い出の夢ひめて 並木の彼方 鈴音をのこし---七色の虹のごと 追憶の彼方 鞭音をのこし 馬車はゆくよ---

(収集プロフィール)

北 廉太郎（きた れんたろう、1920年（大正9年）3月-1940年（昭和15年）9月15日）は昭和期の歌手。

経歴

山形県鶴岡市出身。

1936年（昭和11年）タイヘイレコードから紀多寛として「男の涙」でデビュー。ポリドール移籍と共に瀧廉太郎をもじった北廉太郎に改名。

「青春の丘」、「出船の唄」、「潮来夜船」、「追憶の馬車」、「シナの町」、「ボルガ旅愁」などのヒット曲があり、アイドル歌手として人気を得たが、1940年（昭和15年）、白血病で急逝。享年20。

*「出船の唄」 当時青年歌手として人気を博していた北廉太郎の唄で発売された曲です。その北廉太郎は将来を大いに期待される存在でしたが、残念ながら翌昭和15年に20歳の若さで帰らぬ人となりました。

*（レコード狂の詩・より）

全編に渡って馬車が疾走しまくっている。勿論馬車モノ歌謡の最高峰。細田定雄のバンジョーと小暮正雄のアコーディオン、それとマンダリンの混然とした具合が絶妙で、特に2番と3番の間の間奏と後奏が物凄く素晴らしい。

そして、ポリドールで最も哀愁味のある歌手として人気の北廉とくればもう文句無いわけです。作曲は山下五郎。柳家金語楼の弟。山下五郎の曲は大概ハズレの無いもので、安心して聞けるのも嬉しいところ。編曲は、アコーディオンの小暮正雄でして、編曲の妙味は彼の手になるところが大きいと思います。

当時の写真を見て判るとおり相当の美男子であり、山形県出身で昭和12年ごろにタイヘイで

デビューしてから13年にポリドールに移籍し、相当数の吹込みを残していますが昭和15年に21歳という若さでこの世を去ってしまいました。

いま考察してみると、「幻の名歌手」とは言うけれど、ヒット曲もいくつかあるし、当時の人々の耳にまったく届いていなかったと言うわけではないでしょう。むしろ、近頃の傾向として、戦前に幽明界を異にした歌手は全く省みられないという傾向に埋没しているだけのような気がします。

北廉の歌声を聞いてみても、ちっとも古くないし泥臭い所もない。今の歌手で言うと氷川きよしがコブシを利かせずに寝ぼけて歌っているような感じ、当時のポジションとしては青春歌謡路線歌手。もちろんそういう哀愁味なんてのが嫌いな人には逆に拒絶される部類の歌手かもしれませんが。

北廉の絶頂期はこの「追憶の馬車」の発売された14年頃で、15年に入るとなんとなく病のためか次第にやや精彩を欠いて魅力自体も半減してしまう。そしていまや歌声も存在も消滅状態となっているのはあまりにも悲しい気がします。

主な曲

- | | |
|-------|------------------------------|
| 進軍の一夜 | (古谷玲児：作詞、飯田景応：作曲。昭和十三年) |
| 追憶の馬車 | (松坂直美：作詞、山下五朗：作曲。昭和十四年) |
| 出船の唄 | (清水みのる作詞・倉若晴生作曲、昭和14年) |
| 潮来夜船 | (藤田まさと：作詞、倉若晴生：作曲。昭和十四年九月新譜) |
| 男の行く道 | (松坂直美：作詞、倉若晴生：作曲。昭和十四年) |
| 再見上海 | (詞・木原たけを 曲・江口夜詩 昭和15年) |

高倉敏、川畑文子、ベティ稲田、三丁目文夫などと並んで、私が再評価をめざしている、歌手のひとりである。20歳でなくなったというが、残された写真や歌唱の、成熟した大人っぽさは、どういう訳なのだろう。謎とって、いいほどだろう。唄は、文句なく上手い。クラシックの出身ではないようだが、ソフトなテノールとっていい。急逝は、残念だが、短い活動期間に、多くの名曲を与えられている。ユーチューブ等で、ぜひ聴いて欲しい。この曲は「資料音源」とあるので、発売はなかったのかも知れない。まったく人口に膾炙されていない曲を、選定するのは、かなり迷った。けれど、この時代に創作された、知られざる素晴らしい曲を、ご紹介するのも、意義のあること。この曲は、ぜひ有力な歌手たちに、リメイクして欲しい。若手なら、松原健之、黒川真一郎、三山ひろし、竹島宏、宇都宮さだし、逢川まさき、市川たかし、長谷川真吾、東京大衆歌謡楽団、などが適しているだろう。大物なら、山本譲二、五木ひろし、徳永英明など。

*死亡年齢については、ほかに22歳説と25歳説が、あります。

(松坂直美：詞、福島多歌三：曲 昭和十四年)

かたむく月影 瞳に淡く 今宵旅行く 心を濡らす 夜風は寒く 身に吹けど 男心は 泣きは--

--

(収集プロフィール)

北 廉太郎 (きた れんたろう、1920～1940) は昭和期の歌手。

経歴

山形県鶴岡市出身。1936年(昭和11年)タイヘイレコードから紀多寛として「男の涙」でデビュー。ポリドール移籍と共に、瀧廉太郎をもじった北廉太郎に改名。

「潮来夜船」の大ヒットで知られ、他にも「青春の丘」、「出船の唄」、「追憶の馬車」、「シナの町」、「ヴォルガ旅愁」などヒット曲多数。アイドル歌手として人気を得たが、1940年(昭和15年)、白血病で急逝。享年20。

代表曲

追憶の馬車(昭和14年2月)

青春の丘(昭和14年5月)

出船の唄(昭和14年8月)

潮来夜船(昭和14年9月)*カップリングは、小林千代子「旅のつばくろ」で、両面とも大ヒットした。

テレビでの記憶がない方とっていたが、今回調べてみて、私が子供の頃に亡くなっていた事が判明した。ラジオでは、何回か、聴いたことがあると思うが。取り上げるにあたって、ユーチューブ等で5、6曲試聴してみた。この曲は、あの時代というのに、思い切りロマンティックで、メロディーも美しい。すこしアレンジして、平井堅や夏川りみ、島谷ひとみ、などがリメイクすれば、すぐにもJポップとして通用するだろう。ほかに昭和22年の「若い口笛」や昭和24年の「恋のマドロス」も、歌詞はやや演歌っぽいが、メロディーはバタくさいので、同様にリメイク出来るだろう。彼のオリジナルではないが、久保幸江との共唱の「うちの女房にや髭がある」での、コミカルで気弱な唄いぶりも、ほかの歌手の作例と比較して出色の出来ばえである。軍歌や、演歌調の歌謡曲も、それなりに面白い。

(昭和17年 寺下辰夫：詞、古田徳郎：曲)

ああ 南十字星 憧れの星 故郷はなれて---夢の常夏 我等は住まん---永久の面影 若き命よ-----
うるわしの 星の光よ

(収集プロフィール)

高倉敏(たかくらびん、1916年(大正5年) - 1957年(昭和32年)10月30日)は昭和期の歌手。

経歴

東京出身で、本名は百瀬善之助。日本大学芸術部中退後、中野忠晴が創設した、「コロムビア・ナカノ・リズム・ボーイズ」に参加。

1940年(昭和15年)コロムビアレコードからソロデビューした。

戦前のヒット曲

「あこがれの南十字星」

「かくて神風は吹く」など。

戦後

「恋のマドロス」

「憧れのマドロス」

「海のマドロス」など。いわゆるマドロスもの。

*他の代表曲には、「デンスケ節」、「愉快なお巡りさん」などがある。

1957年(昭和32年)10月30日、胃癌により、41歳の若さで死去。

1938年、発売。この唄は、村田英雄の唄とばかり思っていた。当時、私だけでなく、かなりの若者が、そういう認識であったろう。先日、ようやく楠木の歌唱を聴いたが。その後も、たまに聴いて、累計で30回は聴いている。ただし、この曲は、楠木以前にも、何人かの（有名でない）歌手たちが歌っていて、一部の人々に知られていたようだ。歌唱について、楠木のほうがいいと言う人も、2、3いた。けれど、これは好みによるのでは？と思う。端的に言うと、村田の歌唱は、物凄く男っぽく、力強い。まさに、男唄。楠木の歌唱は、力むことなく、抒情的に盛り上げてゆくスタイル。ただ、内容が内容なので、いつもよりは、やや力強く、ほのかに凄みをかけているが。私は、違う味わいで、それぞれ違うイメージを想起させてくれるから、どちらもOKでは、と思う。まあ、それでは納得出来ない、という方もいるだろうけれど。

義理がすたれば この世は闇だ なまじとめるな 夜の---時世時節は 変ろとままよ 吉良の仁
吉は 男じゃないか---

日本人の、琴線を打つ、歌詞が並んでいる。作詞の佐藤惣之助は、多くの名歌を残しているが、この曲は、彼のベスト5に入るであろう。この唄を聞くと、高倉健や菅原文太、渡哲也、藤岡弘、渡辺謙など、いわゆる律儀で熱い男を、連想する。実生活のキャラはともかくとして、人々は日本の男の、ひとつの理想型を、そこに見出すのだ。

楠木は、晩年、アルコール中毒等で、不遇だったらしいが、5、6曲の名作を、残している。「緑の地平線」、「白い椿の唄」、「トンコ節」、「ハイキングの唄」など。素晴らしい、業績ではないか。私たちは、天上の彼に、賛辞を贈ろう。

（収集プロフィール）

楠木 繁夫（くすのき しげお、1905年1月20日～1956年12月14日）は、昭和期の流行歌の歌手。また、多くの変名で、当時の多くのレコード会社から、レコードを出している。

経歴

1905年（明治37年）、高知県佐川に、父は医師である名門の四男として生まれた。音楽好きの母親の影響で、県立中学時代に音楽家を志し、後継を希望した父の反対を押し切って上京。1924年（大正13年）、東京音楽学校（現：東京藝術大学）師範科に入学。本科の声楽部に進み、「城ヶ島の雨」の作曲家・梁田貞に師事した。学生時代は、同級の高木東六（作曲家、代表作：「空の神兵」「水色のワルツ」）らと行動を共にしていたが、1928年（昭和3年）、学生運動で校則などに抗議したメンバーに入っていたため、高木らとともに除籍処分となった。

退学となった楠木は、1929年（昭和4年）、本名の黒田進で、名古屋にあったツルレコードに「五月音頭」を吹き込みレコード歌手としての活動を始める。専属歌手とならず、コロムビアでの「紅蝙蝠」「カフェー小唄」など、30以上のレーベルで、秋田登、藤村一郎など、50を超える相当数の変名を使いこなして各社でレコーディングしていたが、1934年（昭和9年）に、作曲家・古賀政男を重役として迎えて間もないテイチクの専属になる。この時に、自らの名前が似ていることから、楠木正成（戦前は大楠公と呼ばれた）に傾倒していた当時のテイチク社長・南口重太郎によって、楠木繁夫という芸名が付けられるのであった。1935年（昭和10年）には、古賀政男

とのコンビで、「白い樁の唄」「男のまごころ」「緑の地平線」と大ヒットが続き、一躍大ヒット歌手となる。その後も、「女の階級」「啄木の歌」「人生劇場」とヒットを続けるが、昭和13年、古賀政男がテイチク上層部との対立から退社すると、楠木もビクターに移籍。「馬と兵隊」「東京ラグタイム」など、曲には恵まれたが、ヒットに結びつく作品は少なかった。

1939年（昭和14年）頃からは、スクリーンにも活躍の場を広げ、特に日活作品に数多く出演。マキノ正博の監督による「弥次喜多道中記」ではディック・ミネとコンビで弥次喜多を演じ、大映映画「歌う狸御殿」では、狸の国の総理大臣を演じた。テイチク時代に、同じ会社のヒット歌手・美ち奴との浮名を流し、周囲からは二人は結婚するものと噂が高かったが、1942年（昭和17年）に、再び古賀政男の誘いでコロムビアに移籍した後に撮影した「歌う狸御殿」で共演した歌手・三原純子と、翌年の年末に結婚。戦時中ながら、おしどり夫婦の歌手として、工場慰問などに活躍した。

第二次世界大戦後、自らの作曲作品「思い出の喫茶店」などをレコーディングする一方で、夫婦揃って出演した大映映画「春爛漫狸御殿」をはじめ、「蛇姫道中」「江の島エレジー」などスクリーンにも活躍するが、折から流行していたヒロポンと呼ばれる覚せい剤の影響で、往年の光彩を失っていった。1949年（昭和24年）、古巣のテイチクに移籍し、「紅燃ゆる地平線」「ハルピン恋し」などのヒットを出し、紅白歌合戦にも出演している。三原純子との夫婦揃ってのステージや巡業に活躍していたが、かねてからのヒロポン中毒のため、1953年（昭和28年）の「湯の香恋しや」を最後にレコーディングから遠ざかった。さらに、脳溢血のため、音程が狂うという歌手にとっての致命的なダメージと、愛妻・三原純子の肺結核の悪化が重なり、1956年（昭和31年）の春に夫婦揃ってのステージを名古屋で務めた後、二人は二度と生きて会うことはなかった。将来に悲観した楠木は、宝くじの当選で新築したばかりという東京・新大久保の自宅で、1956年（昭和31年）12月14日、女中を映画見物に出かけさせた後、ひとり物置小屋で、首を吊って自殺。52歳という早すぎる死に、高木東六、松平晃ら生前に親しかった友人たちは「緑の地平線」を合唱して、楠木の棺を見送った。故郷・飛騨高山で転地療養していた妻の三原純子も、彼の後を追うように1959年（昭和34年）に38歳の若さで世を去っている。

代表曲

「轟沈」

「突撃喇叭鳴り渡る」

「白い樁の唄」

「ハイキングの唄」

「緑の地平線」

「女の階級」

「のばせばのびる」

「人生劇場」

「トンコ節」 共演：久保幸江

1937年、発表。この歌の舞台となっているヨコハマは、私が昔、住んでいた街から、電車で1時間くらいの所だった。まだ子供だったので、半額とはいえ電車賃が用意できず、ごくたまにしか行けなかったが、憧れの街だった。子供達にとって、ヨコハマの、そのモダンで明るい、港町のイメージは、主に美空ひばりの歌によって、形成されていた。淡谷の歌も、ラジオや商店街から、年じゅう流れてはいたが、内容が大人すぎたのだ。子供には、理解しにくい内容なのだ。

窓をあければ 港がみえる メリケン波止場の灯が---むせぶ心よ 切ない恋よ 踊るブルースの
切なさよ

単純に言えば、大人の男女の愛と別れの物語なのだが。しかも、定番のマドロス物。しかし、この定番を、淡谷は歌唱の魔法で、深遠な物語にかえる。淡谷が亡くなったあと、気づいたのだが、彼女の歌唱は、ともかく深いのだ。基本がクラシックの発声のせい、耳ざわりのよい声とはいえないが、わづか3分ていどの曲のなかで、通俗を深淵に、ひきずりこむ。これほどの技量をもった歌手は、稀有とっていいであろう。

(収集プロフィール)

淡谷のり子（あわやのりこ、1907年8月12日 - 1999年9月22日）は、青森県青森市出身の歌手。日本のシャンソン界の先駆者であり、代表曲から「ブルースの女王」と呼ばれる。デビュー当初は、綺麗なハイトーンで素直な歌唱だったが、やがて、妖艶なソプラノで昭和モダンの哀愁を歌った。最近では音楽的な側面から「淡谷のり子＝ブルース」という表現に【異議あり】という意見も少なからず見受けられるようになってきた。終生変えることのなかった津軽弁を話す歌手として知られた（正確に言うと、話す言葉は標準語なのだが、イントネーションが訛っていた）。

略歴

1907年、青森の豪商「大五阿波屋」の長女として生まれる。1910年の青森市大火によって生家が没落。10代の頃に実家が破産し、1923年に母と妹と共に上京。東洋音楽学校（後・東洋音楽大学、現・東京音楽大学）ピアノ科に入学する。後に荻野綾子に声楽の資質を見出されて声楽科に編入。オペラ歌手を目指すためクラシックの基礎を学んだ。家がだんだんと貧しくなり、学校を1年間休学して絵画の裸婦のモデルを勤めるなどして生活費を稼いだ。淡谷をモデルにした「裸婦臥像」は二科会に出展された。その後、復学しリリー・レーマンの弟子である柴田稲子の指導を受け首席で卒業した。春に開催されたオール日本新人演奏会(読売新聞主宰)では母校を代表して「魔弾の射手」の「アガーテのアリア」を歌い「十年に一人のソプラノ」と絶賛される。世界恐慌が始まる1929年の春に卒業。母校の研究科に籍を置く。母校主宰の演奏会でクラシックの歌手として活動する。クラシックでは生計が立たず、家を支えるために流行歌を歌う。1930年1月、新譜でポリドールからデビュー盤「久慈浜音頭」が発売。キングでも吹込みをはじめ。当時、佐藤千夜子の活躍以来、奥田良三、川崎豊、内田栄一、四家文子ら声楽家の流行歌の進出が目立っていた。1930年6月、浅草の電気館のステージに立つ。映画館の専属となりアトラクショ

ン等で歌う。当時、東洋音楽学校からは青木晴子、羽衣歌子らが流行歌手として活躍していたが、東京音楽学校出身の音楽家が歌う流行歌よりも低い価値で見られていた。淡谷は流行歌手になり、低俗な歌を歌ったことが墮落とみなされ母校の卒業名簿から抹消された(後年復籍)。

1931年コロムビアへ移籍。古賀メロディーの「私此頃憂鬱よ」がヒット。A面は「酒は涙か溜息か」。歌唱者の藤山一郎は、当時東京音楽学校の学生で、将来を嘱望されていた。卒業後、ビクター専属藤山一郎（音楽家・増永丈夫）となる。後にテイチクーコロムビアを経て数々のヒットを飛ばし、淡谷のり子とは音楽上の盟友である。淡谷はコロムビアでは映画主題歌を中心に外国のポピュラーソングを吹込む。これらの楽曲は、昭和モダンの香りを漂わせていた。1935年の「ドンチャ・マリキータ」はシャンソンとしてヒットし、日本のシャンソン歌手の第1号となる。日中戦争が勃発した1937年に「別れのブルース」が大ヒット。ブルースの情感を出すために吹込み前の晩酒・タバコを呷り、ソプラノの音域をアルトに下げて歌う。その後も数々の名曲を世に送り出し「淡谷のり子」の名をとどろかせる。「もんぺなんかはいて歌っても誰も喜ばない」「化粧やドレスは贅沢ではなく歌手にとっての戦闘服」という信念の元、戦争中に禁止されていたパーマをかけ、ドレスに身を包み、死地に赴く兵士たちの心を慰めながら歌い送っていた。英米人の捕虜がいる場面では日本兵に背をむけ彼等に向かい敢えて英語で歌唱する、恋愛物を多く取り上げる等、当局に睨まれながらも歌い手としての気骨を見せ、その結果書かされた始末書は、数センチもの厚さに達したとのことである。

戦後はテイチク、ビクターで活躍。やがて、ファルセット唱法になる。音楽の基礎がしっかりしてるので、胸声一本ではなくハイトーンを失わないところに歌唱技術の深さがあった。晩年はオーディション番組の審査員やバラエティ番組などに出演する。

信念のある生き方と、お嬢様育ちらしい天真爛漫さから、ストレートな物言いを行い物議を醸すことも少なくなかった。反面、淡谷を慕う歌手も多く、ディック・ミネや越路吹雪らに「姉さん」と呼ばれていたという。また後輩の美川憲一などと親交が深かった。

1985年の「淡谷のり子・区民のための平和コンサート」、1990年の新谷のり子と「甦れ、地球」を開く等、平和を願うコンサートを数多く開いたが、1999年歌に捧げてきた生涯に幕を閉じる。

エピソードなど

*淡谷の事をよく知らずに知人の紹介などで会いに来た初対面の礼儀知らずな一般人の若者に対してもとても礼儀正しく、楽屋などで椅子に腰掛けていなくてはならない体調でもわざわざ立ち上がって先に丁寧な挨拶をする人でもあった。

賞歴

1971年: レコード大賞特別賞

青森市の名誉市民（4人目、女性では初）

代表曲

夜の東京（1929年）

私此頃憂鬱よ（1931年）

巴里祭（1936年）

暗い日曜日（1936年）

別れのブルース（1937年）

人の気も知らないで（1938年）

雨のブルース（1938年）

夜のプラットホーム（1939年 録音は済ませたものの、発売禁止となる）

満州ブルース（1940年）

たそがれのマニラ（1944年）

嘆きのブルース（1948年）

君忘れじのブルース（1948年）

人の気も知らないで（1951年）

雨のプラットホーム（1954年）

著書

私のいいふりこき人生: 著者:淡谷のり子、海竜社（1984年）

淡谷のり子ーわが放浪記：日本図書センター（1997年）

その他

菊池清麿「人物昭和流行歌史」 「昭和モダンの哀愁ー妖艶のソプラノ淡谷のり子」(『SPレコード』第50ー53号)

私の、再評価すべき歌手リストの、常に上位にいる方である。当時の同僚歌手たちに比べて、味わいは薄い、それがこの方の個性なのだ。そのため、感情のバリアが薄く、唄の世界がぐんと広がるのだ。それが一番ラッキーな形で出たのが「うるわしの南十字星」だが、次にこの曲だろう。神様が、あと10年のときを、高倉に与えてくれていたら、もっと素晴らしい業績を、私達に残してくれていたことだろう。

(詞 野村俊夫 曲 古賀政男 1949)

男いちずの 血潮が燃えて 思い切れたら 後へは引かぬ 明日の未練はないが 星の流れが
気にかかる---

(収集プロフィール)

高倉 敏 (たかくら びん、1916年(大正5年)~1957年(昭和32年)) 昭和期の歌手。

経歴

東京出身で、本名は百瀬善之助。日本大学芸術部中退後、中野忠晴が創設した、「コロムビア・ナカノ・リズム・ボーイズ」に参加。

1940年(昭和15年)コロムビアからソロデビューした。戦前のヒット曲には「うるわしの南十字星」や「かくて神風は吹く」など。戦後、「恋のマドロス」「海のマドロス」など、いわゆるマドロスものを多く吹き込む。他の代表曲には、「ダンスケ節」「緋総の籠」などがある。

*余談だが、作曲家の市川昭介が、18歳のとき歌手を目指して上京後、一時期、高倉の付き人をしていたという。

1957年(昭和32年)10月30日、胃癌により、41歳の若さで死去。

主な曲

うるわしの南十字星 1942

若い口笛 1947

恋のマドロス 1949

憧れのマドロス 1950

海のマドロス

ダンスケ節

愉快なお巡りさん

緋総の籠

出演映画

あの夢この歌(1948)

憧れの星座(1953)

うれし恥かし看板娘(1954) 役・そばやの清吉

湯の町椿(1955)

私はこの方の名を、あけお、と読んでいた。あな、恥ずかしや。唄い方で、すぐにクラシック系の方と判る。徳山環のように、気張って唄っている訳ではないのだが。なかなかの美声である。5、6回聴いてみたが、私ははじめ、この曲の意図というものが、いまいよく判らなかつた。歌謡曲なのだが、これといった出来事はなく、特定の愛や感情も、無に近い。むしろ、労働歌に近い、ような感じを受ける。残ってきた唄だけあって、調子よく、耳に残りやすいメロディーと詞。つい100年ほど前までは、こういう仕事に従事していた人々が、たくさんいたのだろう。

(藤浦 洸:作詞、古賀政男:作曲。昭和十九年*戦後・近江俊郎がカバー)

おいそこゆく上り船 今夜は月夜だ 何処ゆきだ え 船底一杯荷を積んで 釜石ゆきだよ--

(収集プロフィール)

波平 暁男(なみひら あきお、1915年(大正4年) - 1983年(昭和58年))は昭和期の歌手。

経歴

沖縄県出身。東京音楽学校在学中の1941年(昭和16年)コロムビアレコードからデビュー。代表曲には、霧島昇との「若鷺の歌」、「月夜船」、「雷撃隊出動の歌」、「勝利の日まで」などがあり、戦時歌謡が中心である。

戦後は歌手を引退し、故郷の沖縄で歌謡学院を開いて後進の育成を行った。

*労働の時に歌う歌。田植え歌や木こり歌、馬子唄、舟歌、ブルース、ミリタリーケイデンスなど。

主な曲

若鷺の歌

月夜船

勝利の日まで

決戦歌謡「制空戦士」

君こそ次の荒鷺だ